

## 菩薩が目指すもの

## —ヴィマラミトラの『般若心経注』後半部より—

堀内俊郎

## 1. はじめに

本稿は、チベット大蔵経に残る『般若心経（心経）』注釈文献<sup>1</sup>の総合的研究の一端としてヴィマラミトラ（8世紀）による『般若心経注（PHT）』の全訳と校訂テキストの提示を行う試みの続編である<sup>2</sup>。PHTの重要性や先行研究の問題点などは拙稿で論じたのでここでは繰り返さない。

本稿で扱う範囲は、法成訳（チベット語からの重訳とされる。T no. 255）『心経』で「超過顛倒。究竟涅槃。三世一切諸佛。亦皆依般若波羅蜜多故。證得無上正等菩提。舍利子。是故當知。般若波羅蜜多大蜜咒者。是大明咒。是無上咒。是無等等咒」、玄奘訳（T no. 251）では「遠離顛倒夢想。究竟涅槃。三世諸佛。依般若波羅蜜多故。得阿耨多羅三藐三菩提。故知般若波羅蜜多。是大神咒。是大明咒。是無上咒。是無等等咒」に相当する箇所である。

チベット語訳としてのみ残る本PHTの読み直しの結果、本稿で新たに判明したこと、あるいは筆者による新たな読解の結果は以下の通り。

- ・PHTから抽出される『心経』のテキストは \*viparyāsātikrānta-niṣṭhānirvāṇaḥ である。
- ・PHTは、『心経』の究竟涅槃 (niṣṭhā-nirvāṇaḥ) という語を、(a) 究竟（完成）による涅槃を有する者 (\*niṣṭhayā nirvāṇam asya)、(b) 究竟を本質とする涅槃を有する者

1 インド撰述とされる8つの大本『心経』注釈文献について、筆者はこれまで「インドにおける『般若心経』注釈文献」や「Indian Commentaries on the *Prajñāpāramitāhṛdaya*」などと表記してきた。しかし、かつて論じたように、それらのうちのJñānamitra注(D no. 3819)とŚrīsimha-Vairocana注(D no. 4353)は最初からチベット語で書かれた文献である。また8つのいずれもサンスクリットとして残ってはいない。ゆえに、筆者はIABS 19 (2022年8月)にて、以下のように述べた。Hence, these should not be called “the Indian commentaries on the *Heart Sutra*,” but rather “the commentaries on the long *Heart Sutra* that are included in the Tibetan canon.” Then we can refer to a larger number of related works collectively. 「チベット大蔵経に残る大本『心経』の注釈書」というこの枠組みは、8つ以外の諸注釈書を総合的に検討していくための一つの有効な視点となると思う。

その点で、渡辺 [2016] (『集成』32)による以下の指摘は慧眼であろう。「それらのサンスクリット原典は一つも残っておらず、漢訳もされなかった。しかも、それらはすべてがチベット語訳で現存しているにすぎない。あるいは、サンスクリット原典などもともとなかったのかもしれない。ともかく、この意味でもインド・チベットと一纏めにして考えたいのである。」

2 一連の拙稿では当初は1～3と連番にして発表していたのだが、3の直後の箇所は都合により飛ばしたので、それ以降は拙稿に番号を振ることはやめた。続きの箇所は名前を改めた2つの論文として発表しているため、本稿は連番では6ということになる。

(\*niṣṭhātmakam nirvāṇam asya)、という2通りに解釈していた。

- ・PHTはこの前の箇所(D276b, 拙稿 [2022: 186-187])で、「自性が空であるから一切法が認識されないようなところ、そのようなところへと、(i) 誰が活動し、(ii) なぜ活動するのか、[そして、] (iii) 活動の結果は何か？」という問いを立てていた。従来それに対する回答は理解されていなかったが、今回の読解の結果、PHTは、『現觀莊嚴論』(AA)に説かれる(1) 心大性、(2) 断大性、(3) 証大性という「三大性」の枠組みを用いつつ、『心経』の経句と対応させて、以下のように回答していることが明らかとなった(便宜的に玄奘訳でも提示する)。

(i) 「菩提薩埵」(たち)は、般若波羅蜜に依拠(ā√śri)して住する(vi√hr)ことによって、(ii) 三大性のために活動する。具体的には、

(ii-1) 「心無罣礙(。無罣礙)故(cittāvarāṇanāstitvād)。無有恐怖(atrasto)。遠離顛倒夢想。究竟涅槃(\*viparyāsātikrānta-niṣṭhānirvāṇaḥ)。」 = (2) 断大性

(ii-2) 阿耨多羅(anuttarāṃ) = (1) 心大性；得～三藐三菩提(samyaksambodhim abhisambuddhāḥ) = (3) 証大性である。

(iii) 活動の結果も、「三世諸佛～」という同じ経句によって示されている。ただしその場合は菩薩の状態の時ではなく「完成した時」つまり仏位においてと限定が付き、その際には断円満(sampat)と証円満という特殊な語(それぞれの大きさ(mahattva)の完成・達成形態ということであろう)が用いられ、経句との対応では、

anuttarāṃ = (2') 断円満；samyaksambodhim abhisambuddhāḥ = (3') 証円満となる。

これがPHTが『心経』に読み込んだ、「菩薩が目指すもの」と理解しうる。

なお、これはPHTが「三世諸佛～」の「諸仏」というのが菩薩も指し、文字通り諸仏も指すと理解していることから可能となる解釈であろう(以下も参照)。

- ・PHTは、玄奘訳『心経』で「三世諸佛。依般若波羅蜜多故。得阿耨多羅三藐三菩提」という経文を、「第十地(菩薩の最終段階)に留まっている菩薩は、般若波羅蜜 = 「如来の知の原因である真実」(tathāgatajñānasamudayasatya、起如来智諦)に依拠して、無上正等覚を悟った」と解釈していた。すなわち、PHTは、当該箇所における「般若波羅蜜(多)」を、菩薩が仏になるための最終的な跳躍台と理解していた。

特に「究竟涅槃」の箇所は難解で筆者の理解も何度も考え直した上での試案であり、『心経』の異読も勘案したさらなる検討の必要もあろう。

## 2. テキストと訳注

(-niṣṭhānirvāṇaḥ)

PHT: D277b-, P298b, T25-:

mya ngan las 'das pa ni rnam par rtog pa 'gags pa'o// mthar phyin pa ni mthar thug pa ste (pa te]

T: pa las te DP)/ ji skad du sa bcu pa las/

bsgom pas spang <sup>[T26]</sup> bar bya ba'i (spang bar bya ba'i] DT; spangs pa'i P) rnam par rtog pa  
rnam par (rnam par] DP; rnam T) spangs pa'i phyir rnam par dag pa'i mthar phyin pa yin  
te</> de'i gong nas (nas] DP; du T) spang bar bya ba'i rnam par rtog pa med pa'i phyir ro  
zhes gsungs so//

mthar phyin pas sam (sam] PT; sam sems D) mthar phyin pa'i bdag nyid 'di'i (nyid 'di'i] T;  
nyid DP) mya ngan las 'das pa (pa] T; pa 'di DP) yin pas de la de skad ces gsungs so//

「涅槃 (nirvāṇa)」とは、構想分別 (\*vikalpa) の抑止 ( / 止滅、\*nirodha) である。「究竟 (完成、niṣṭhā)」とは、終局である<sup>3</sup>。すなわち、『十地 [経]』<sup>4</sup>に、

「修所断の (\*bhāvanā-heya/prahātavya) 構想分別 (\*vikalpa) を断ずることにより  
(\*prahāṇāt)、浄化の完成<sup>5</sup>がある。なぜなら、それ以上に断じられるべき構想分別は  
存在しないから」

と説かれている。

(a) 究竟による〔涅槃が〕この者にはある、あるいは、(b) 究竟を本質とする涅槃がこの  
者にある (究竟を本質とする涅槃を有する者) ので、彼に対して、そのように (= niṣṭhā-nirvāṇaḥ と) 言われた<sup>6</sup>。

3 経句の言い換えであろうから、意味上、Tを採用した。DPによれば、「終局に基づくものである」となり、終局よりさらなるものがあることになり、不合理。また、この箇所から、mthar phyin pa は mthar thug pa (\*paryanta/koṭi/paryavasāna) という名詞で言い換えられる名詞だということがわかる。すなわち、漢訳でしばしば「究竟涅槃」とされる本箇所の梵本としては niṣṭhā-nirvāṇaḥ、niṣṭhā-nirvāṇam prāpnoti や様々な corrupt した形もある (白石 [1939 (1988: 524)], Conze [1967: 152]) が、PHTによれば niṣṭhā-nirvāṇaḥ が想定されることになる (これは Conze が校訂本で採用した読みである。実のところ Conze 同 fn. 44 はこの形での写本を報告してはいない (!) のだが)。他方、『心経』のチベット語訳は mya ngan las 'das pa'i mthar phyin to である。これの素直な読みは Silk [1994] reach the finale which is nirvāṇa (180), reach the finale, which is nirvāṇa (181) であろう。ただ、ヴィマラミトラの解釈はそうではない。注5、6も参照。

4 出典不明。

5 rnam par dag pa'i mthar phyin pa:

mthar phyin pa で「究竟」か、「究竟に至った〔人〕」か。Negi などの用例を見たところ、両方の可能性があるようだが、mthar phyin pa で niṣṭhā の訳語である例が採録されていることは確かである。また、pa'i でつながれる2句がコンパウンドか Gen.Tp. なのかも問われる。別文献だが、類似する rnam par dag pa'i mthar phyin par gyur pa という語は、RGV, ad., I.18 では、viśuddhīniṣṭhāgatam の訳となっている (D phi 83a7)。しかし、\*nirvāṇāniṣṭhāgataḥ という『心経』の異訳が報告されていない以上、ここでそれに基づく必要はあるまい。また、注3との関連からも、筆者としては PHT の rnam par dag pa'i mthar phyin pa に \*viśuddher niṣṭhā を想定した。

6 「究竟涅槃」という様々に議論となる語に対する注釈だが、諸版に異訳があり、難解。まず、筆者はひとまず T に基づいて以下のような校訂を行った。

mthar phyin pas sam (sam] PT; sam sems D) mthar phyin pa'i bdag nyid 'di'i (nyid 'di'i] T; nyid DP) mya ngan las 'das pa (pa] T; pa 'di DP) yin pas de la de skad ces gsungs so//

Lopez, 65: Because nirvāṇa is the end or [because] it is the nature of the mind that has gone to end, it says that [goes to the completion of nirvāṇa].

大八木: 究竟に到った者、あるいは究竟に到った自性がこの涅槃であるので、それについてそのように言うのである。(104)

Lopez は D に基づき大八木は P に基づくが、D と P の読みを忠実に訳せば以下の通り。

D: mthar phyin pas sam sems mthar phyin pa'i bdag nyid mya ngan las 'das pa 'di yin pas ...

D: 究竟 (完成) による、あるいは心の究竟を本質とするものがこの涅槃であるので、

P: mthar phyin pas sam mthar phyin pa'i bdag nyid mya ngan las 'das pa 'di yin pas ...

D: 究竟による、あるいは究竟を本質とするものがこの涅槃であるので、

(\*viparyāsātikrānta-niṣṭhānirvāṇah)

de phyin ci log las 'das pa yang yin mya ngan las 'das pa'i mthar phyin pa yang yin pas phyin ci log las 'das pas (pas] DP; pa T, read nas) mya ngan las 'das pa'i mthar phyin pa yin te/ shes rab kyi pha rol tu phyin pa la brten cing gnas par (par] DP; pa na T) 'gyur bas (ii-1) de la (i) byang <sup>ID278a</sup> chub sems dpa' mams 'jug go// (2) spong ba che ba nyid 'dis ni de'i ched du 'jug pa'i rgyu bstan pa yin te/ de'i ched du 'jug pa'i phyir ro//

しかし、まず、その後に出る語 de la de skad ces gsungs so// (\*sa tathoktah) から、語義解釈がなされていることが明らかである。そして、ここは niṣṭhā-nirvāṇah (後述) という Bv. コンパウンドの解釈である。とすれば、以下の T 本が注目に値する。

T: mthar phyin pas sam mthar phyin pa'i bdag nyid 'di'i mya ngan las 'das pa yin pas de la de skad ces gsungs so// T: 究竟による (\*niṣṭhāyā)、あるいは究竟を本質とする (\*niṣṭhātmaka) 涅槃がこの者にある (\*asya) ので、彼がそのように言われる。

つまり、DP には違った場所に 'di とあるが、T には 'di'i, \*asya とある。そしてこれは Bv. コンパウンドを説明する語と理解する。無論、通常はこのような場合には関係代名詞、単数男性形なら yasya が用いられる。しかし、asya の例も存在する。たとえば、Hetubinduṭīkā は、abhinnayogakṣematvāt という語を説明するに際し、abhinnau yogakṣemāv asyeti sa tathoktah (この者には (asya) 分かつたれない yoga と kṣema があるので、彼はそのように (=abhinnayogakṣema と) 言われる) と言っている。なお、そのチベット語訳には grub pa dang bde ba tha mi dad pa ni 'di yin no zhes de bzhin du bshad do// (D we 203a, P zhe 251a6) とある。

その観点からいえば、P も再考の余地がある。

P: mthar phyin pas sam mthar phyin pa'i bdag nyid mya ngan las 'das pa 'di yin pas ...

D にも存する波線部の 'di (これ) という語は余計であり、説明しがたい。他方 T では異なった場所に 'di'i とある。想定される梵本の語順からいえば、D と P の位置に 'di'i とあるのが最も好ましい。それについて、\*'di'i>'di は誤伝としてありうるというのが一つの説明であるが、先の Hetubinduṭīkā のチベット語訳では asya が 'di (yin no) と訳されていたので、'di のままで asya の訳語とみなしうるかもしれない。いずれにせよ、T の読み、あるいはむしろ P の 'di を 'di'i に変えた形は

mthar phyin pas sam mthar phyin pa'i bdag nyid mya ngan las 'das pa 'di<'i> yin pas de la de skad ces gsungs so// であり、これから想定される原文は

\*niṣṭhāyā niṣṭhātmakaṃ vā nirvāṇam asyeti sa tathoktah.

となる。これは niṣṭhā-nirvāṇah という Bv. コンパウンドの注釈として妥当な形の一つであろう。また、mthar phyin pa'i bdag nyid 自体も明らかに Bv. なので、mthar phyin pa は名詞 niṣṭhā の訳語であることの傍証ともなる。

要するに、PHT は、niṣṭhā-nirvāṇah という語を、(a) 究竟(完成)による涅槃を有する者 (\*niṣṭhāyā nirvāṇam asya)、(b) 究竟を本質とする涅槃を有する者 (\*niṣṭhātmakaṃ nirvāṇam asya)、という 2 通りに解釈していた、というのが筆者の解釈である。

さらに踏み込んで言えば、PHT では涅槃は「構想分別 (vikalpa) の抑止 (nirodha. この語には suppression と cessation の意味がある後者で止滅の意味のほうがよいか)」と明確に定義され、niṣṭhā は名詞表現で「終局、完成」と言い換えられているだけだが、PHT に言及された『十地經』の記述からすれば、修行の完成という意味を読み込めよう。とすれば、PHT は niṣṭhā-nirvāṇah (究竟涅槃) という語を、(a) 修行の完成により構想分別の抑止をした者、(b) 修行の完成を本質とする構想分別の抑止をした者、という 2 通りに解釈していた、と、より踏み込んで現代語訳できよう。

ちなみに、PHT は前の文では nirvāṇa を先に注釈しているので nirvāṇa が先にくるコンパウンドが原文であった可能性もゼロではなからうが、このような異議は報告されておらず、さらに、コンパウンドを分解するこの一文では mthar phyin pa が先に来ているので、その想定は不要であろう。また、niṣṭhānirvāṇah のコンパウンドの理解としては、「涅槃を完成として有する者 (=涅槃をもって完成とする者) (\*niṣṭhā nirvāṇam yasya sa tathoktah) というのが素直なように思えるが、これだと必ずしも『心經』の文脈にはそぐわない。なお、Attwood [2018: 17] は niṣṭhānirvāṇah を「(and) his extinction is complete」と訳す。

なお、小本『心經』では niṣṭhā-nirvāṇah とあり、大本でもその読みが採用される場合が多い。しかし、筆者は、「(1) その読みには疑問がある (atyantaniṣṭhānirvāṇa などという用例は承知しているが)。(2) niṣṭhā-nirvāṇah は不完全で動詞を必要とするという意見があるがこれは Bv. コンパウンドであり動詞を必要としない」という二つのことを考えているが、いずれ別の機会に論じたい。

顛倒から超越した者でもあり、究竟涅槃<sup>7</sup>を有する者でもあるので、「顛倒から超越し・究竟涅槃を有する者」である<sup>8</sup>。すなわち、般若波羅蜜に依拠 (ā√sri) して住する (vi√hr) ことによって、(ii'-1) それ (「顛倒から超越し・究竟涅槃を有する者」) へと、(i') 菩薩たちは、活動するのである<sup>9</sup>。この (2) 断大性によって、そのために活動するところの理由・原因を〔経は〕示す。そのために活動するからである。

(tryadhvavyavasthitāḥ sarvabuddhāḥ)

dus <sup>IP299a</sup>gsum du zhes 'byung ba la sogs pas (ii-2) (1) sems can thams cad kyi mchog tu gyur pa (pa9] DT; pas P) sems che ba nyid dang (3) rtogs pa che ba nyid gnyis kyi ched du bstan to//

dus gsum zhes bya ba (zhes bya ba] DP; φ T) ni 'das pa dang ma 'ongs pa dang da ltar byung ba'o// de dag na nam par bzhugs (bzhugs] DP; zhugs T) pa'i (pa'i] DP; pa ni T) sangs rgyas thams cad de/ blo khyad par dang ldan pa'i phyir sangs rgyas so// de thams cad kyang yin la sangs rgyas kyang yin pas sangs rgyas thams cad do//

「三世の」云々によって、(ii'-2) (1) 一切の有情のうちの最上の者であるという心大性と (3) 証大性という二つのために〔菩薩は活動する〕ということを示す<sup>10</sup>。

7 このコンパウンドには前注に挙げたように二つの解釈があるので両義を含ませるべく漢訳を提示しておいた。

8 Lopez, 65-66: Therefore, because they have passed beyond sorrow as well as gone to the completion of nirvāṇa, they have passed beyond sorrow and gone to the completion of nirvāṇa;  
大八木: それは誤りを超えたものでもあり涅槃の究竟に到ったものでもあるので「誤りを超えたことで涅槃の究竟に到るものである」。(104)

なお、Lopez 訳の sorrow は error の間違いであろう。Lopez, vii における氏の『心経』の英訳では当該箇所は (completely beyond) error と訳されているから。

さて、先行訳は指摘しないが、de ... yang yin ... yang yin pas とは、表記に多少のブレはあるものの Kdh. の分解の際に使われる一種の定型句である。ゆえに、PHT は、通常 2 語と読まれる viparyāsātikrānta-niṣṭhānirvāṇaḥ (異読あり) を、viparyāsātikrānta-niṣṭhānirvāṇaḥ という 1 語のコンパウンドとみていたことになる。翻訳チベット語文献におけるこのコンパウンド解釈は常識に属すると思われるが、本 PHT 内部から一例を提示しよう。同論の直後の箇所では sarvabuddhāḥ が Kdh. として解釈されるのだが、以下のようにある。

PHT: de thams cad kyang yin la sangs rgyas kyang yin pas sangs rgyas thams cad do//

それ〔ら〕は「一切」でもあり、「仏」でもあるので、「一切の仏 (Kdh.)」である。

梵本もある別文献で示してみよう。

AKVy, 9.21-22: paramārthaś cāsau dharmāś ca paramārthadharmāḥ. (D gu 75b: 'di ni don dam pa yang yin la chos kyang yin pas don dam pa'i chos so//)

これは勝義でもあり法でもあるので「勝義という法 (Kdh.)」である。

かくして、今回の検討により、PHT から抽出される『心経』のテキストは \*viparyāsātikrānta-niṣṭhānirvāṇaḥ であったという、ヴィマラミトラの見ていた『心経』の異読を新たに一点指摘しておく。なお、白石 [1939 (1988) : 524] に、最後部を -o ではなく -a- と、すなわち viparyāsātikrānta- と読む 2 本の写本があることが報告されている。

9 Lopez, 66: ; because they depend on and abide in the perfection of wisdom, [278a] bodhisattvas enter it.

大八木: すなわち、般若波羅蜜多に依存してとどまるものとなるので、そこに諸々の菩薩も入るのである。(104)

先行訳は指摘しないが、de la は、カッコ内に示したことを指す。さらに、この箇所は、PHT が『心経』の cittāvarāṇanāstivād という語を注釈する直前に言及していた三点の質問 ((i) su zhiḡ 'jug/ (ii) ci' i phyir 'jug/ (iii) 'jug pa' i 'bras bu ci yin. PHT, D276b, 拙稿 [2022: 186-187]) のうちの二つに対する回答の一端となっている ((ii) ci' i phyir 'jug > (ii') ~ched du 'jug)。翻訳とは単なる語句の置き換えではない。このような大きな枠組みをとらえて指摘することが必要。次注も参照

10 (ii) の回答の続きである。~ched du に注意。回答は質問の直後 (拙稿 [2022: 187]) から開始されて

「三世」とは、過去と未来と現在である。それら（三世）に「住する一切の仏」〔という中、〕優れた知を有するから、「仏」である。それ〔ら〕は「一切」でもあり、「仏」でもあるので、「一切の仏 (Kdh.)」である。

**rnam par snang mdzad mngon par rdzogs par byang chub pa las** (las] DP; las kyang T) ji  
skad du/

sa bcu dag ni rab bsgrubs nas// dbang gi rnam pa thob pa yin//

stong pa sgyu ma lta bu'i (bu'i] DP; bu T) chos// gang gis 'dir ni kun mkhyen cing//

sems can kun gyi rnam mkhyen pa// sangs rgyas zhes ni brjod pa yin//

(MVA, D tha 227a1-2, P tha 191b6-7:

gang gis sa bcu bsgrubs nas ni// dbang bcu legs rtogs khong du chud//<sup>11</sup>

stong pa sgyu ma 'dra ba'i chos// rnam pa thams cad mkhyen cing 'dir//

'jig rten kun gyi tshul mkhyen pa// sangs rgyas zhes ni bya ba yin//

『大日経』 T no. 848, 18.42c18-20:

成就十地等 自在善通達

諸法空如幻 知此一切同

解諸世間趣 故名爲正覺)

zhes gsungs so//

『Vairocanābhisambodhi (大日経)』<sup>12</sup>に、

「十地を成就して<sup>13</sup>、自在のあり方を得て / 理解して、

空で幻のような法を（法（現象）は空（自性を欠いており）で幻のようであると）、

この世で遍く知り、

一切の有情のあり方を知る者が、仏陀と言われる」

と説かれている。

(prajñāpāramitām āśritya)

**shes rab kyi pha rol tu phyin pa la** (pa la] DT; pas P) zhes 'byung ba ni de bzhin gshegs pa'i ye

いたので、要するに、前注の質問に対する答えを玄奘訳『心経』の文句でもって示せば、(i)「菩提薩埵（たち）は、(ii-1)「心無罣礙（。無罣礙）故。無有恐怖。遠離顛倒夢想。究竟涅槃。」（= 断大性）と (ii-2)「三世諸佛〜」（= 心大性、証大性）という三大性のために活動する、ということ。さらなる説明と (iii) については注 23 を参照。

11 大八木 [2002, (32)] : 「十地を成就して 十力によく通達し了解するのか。」大八木氏は gang とあればほぼ決まって疑問詞として訳すが、誤り。

12 Lopez 氏は無言だが、大八木 [2002: (31) ff.] が藏 (D, P)・漢訳を提示し、関連文献も詳細に列挙している。談等 [2005] は漢訳を提示する。漢訳第 26 章、チベット語訳第 28 章。

13 大八木:「十地を自ら成就して」(105)。「自ら」というのがどこから来たのかと疑問に思っていたところ、大八木 [2002: (30)] でのチベット文字の誤読 (sa bcu dag ni rang bsgrubs nas) に基づくものだった模様。この点については付録の例 4 も参照。

shes kun 'byung ba'i (ba'i] T; ba DP) bden pa'i bdag nyid la yin te/ mnam pa thams cad mkhyen pa nyid ces brjod pa gang yin pa la bya'o// shes rab kyi pha rol tu phyin pa la brten nas zhes 'byung ba ni 'di yang dag par rdzogs pa'i byang chub las dus snga ma'i phyir ro// mnam pa thams <sup>[T27]</sup> cad mkhyen pa nyid 'di ni bar chad med pa'i ting nge 'dzin yin par blta bar bya ste/ **shes rab kyi pha rol tu phyin pa nyi khri lnga stong pa dang/** de'i man ngag **mngon par rtogs pa'i rgyan** las ji skad du/

*sangs rgyas nyid 'thob bar chad med//*

bar chad med pa'i ting 'dzin *de* (de] em.; te DPT) //

mnam pa thams cad mkhyen pa yin//

de yi (de yi] DP; de'i T (unmetr. ) dmigs pa dngos med de (med de] DP; po med T) //

dran pa yang ni bdag por 'dod//

nam pa 'di ('di] DP; 'dir T) ni zhi ba (zhi ba] PT; bzhi pa D) nyid//

mtshan nyid med pa mtshan nyid yin (med pa mtshan nyid yin] DP; mtshan nyid med pa yin T)//

(kṛtvā puṇyabahuṭvena) buddhatvāpter anantarāḥ |

ānantaryasamādhiḥ sa sarvākārajñatā ca tat || AA, 5.38bcd ||

ālambanam abhāvo 'sya smṛtiś cādhipatir mataḥ |

ākārah śāntatā cātra (jalpā jalpipravādinām) || AA, 5.39 || 兵藤 [2000: 408-409] (テクスト), 96 (和訳))

zhes gsungs so//

「般若波羅蜜に」とは、“如来智の原因である真実”(起如来智諦、tathāgatajñānasamudayasatya) を本質とする〔般若波羅蜜〕に、である<sup>14</sup>。すなわち、“一切種智性”(\*sarvākārajñatā) と言われるものを指す。「般若波羅蜜に依拠して」とは、これ

14 この箇所に対する先行研究の誤読は拙稿 [2019c: 11-12] で指摘したので繰り返さない。de bzhin gshegs pa'i ye shes kun 'byung ba'i/ba bden pa は、『十地経』(第五地)に説かれるいわゆる「十諦」の一つ。ヴィマラミトラは経文のこの箇所での「般若波羅蜜」を、これを指すものと理解しているということ。

Dbh, (R) 42.C, (K) 82.4: tathāgatajñānasamudayasatyakuśalaś

なお、同拙稿で指摘したようにこの術語は同じヴィマラミトラ著の SPT にも出る。SPT, D27a1: de la de bzhin gshegs pa'i ni de bzhin gshegs pa'i ye shes kun 'byung ba'i bden bas thob par bya ba yin pas 'dir ma bshad do// そのなか、如来〔地〕は、起如来智諦によって得られるべきものであるものであるので、ここでは説かれていない。

さらにここで PHT: shes rab kyi pha rol tu phyin pa la (pa la] DT; pas P) zhes 'byung ba ni de bzhin gshegs pa'i ye shes kun 'byung ba'i (ba'i] T; ba DP) bden pa'i bdag nyid la yin te/ から想定される原語を提示してみれば、\*prajñāpāramitām iti tathāgatajñānasamudayasatyātmikām.

であろう。Cf. AAA, 188.5: imām iti samudaye 'nvayajñānātmikām. (D cha 102a5-6: shes rab kyi pha rol tu phyin pa 'di (\*imām prajñāpāramitām) zhes bya ba ni kun 'byung la rjes su shes pa'i bdag nyid can no//)

また、同拙稿で述べたようにゴク・ロデンシューラブは「三世諸仏」という経文を「第十地の特殊な道に住している諸菩薩 (sa bcu pa'i khyad par gyi lam la gnas pa'i byang chub sems dpa' mams nyid)」と注釈していた。それを合わせて考えれば、PHT は、玄奘訳「心経」で「三世諸佛。依般若波羅蜜多故。得阿耨多羅三藐三菩提」という経文を、「第十地(菩薩の最終段階)の特殊な道に留まっている菩薩は、「如来の知の原因である真実」(tathāgatajñānasamudayasatya、起如来智諦)に依存して、無上正等覺を悟った」と解釈していたと言える。通常諸仏はさらに悟る必要はなく菩薩が悟って仏になるのであるから PHT の解釈は妥当であろう。

は、正等覚よりも前の時であるから。この一切種智性は、無間三昧 (ānantaryasamādhi) であると見られるべきである<sup>15</sup>。『二万五千〔頌〕般若』と、その教誨である『現觀莊嚴論』<sup>16</sup>に、

「仏陀たることを得る直前の無間三昧<sup>17</sup>、それが、一切種智性である。

この〔智の〕認識対象は非存在であり、念が増上〔縁〕である。

そして、ここで、形相は寂靜性である。無相が相である」

と説かれている。

(anuttarāṃ samyaksaṃbodhim abhisambuddhāḥ)

bla na med pa zhes 'byung ba ni thob pa dang dmigs pa dang sgrub pa rnams (rnams PT; mam pa D) 'di las gong na med pa'i phyir ro// yang dag par<sup>[P299b]</sup> zhes 'byung ba ni phyin ci ma log par ro// mnyam par zhes (zhes) DT; φ P) 'byung ba ni mtshan nyid med pa nyid kyis mtshan nyid gcig pa'i phyir ro// byang chub ni rtogs pa'o// mngon par ni mngon sum mo (mo) DP; du ste T) // mnyam par sangs rgyas pa ni rdzogs par sangs rgyas<sup>[D278b]</sup> so//

「無上 (anuttara)」とは、取得と認識対象と実践<sup>18</sup>が、これより上なものはないからである。「正 (samyak)」とは、不顛倒 (\*aviparīta) に。「等 (sam)」とは、特徴 (相) が存在しないものであることによって、同一の特徴 (\*ekalakṣaṇa) を持つものであるから。「菩提 (bodhi)」とは、証得 (\*adhigama) である。「現 (abhi)」とは、現前に。平等に

15 Lopez, 66: this knowledge of all aspects is to be seen as the uninterrupted samādhi [at the end of the tenth stage]. 大八木：このすべての種類を知る性質は間断ない瞑想であると見るべきである。(105)

Lopez 訳が適訳。

16 Lopez 氏比定。大八木氏は花藤 [2000] の和訳も提示している。なお、Lopez 氏、談等が注意したように、第二偈の pāda d が異なっている。ここで PHT から梵本を想定してみれば、\*lakṣaṇābhāvalakṣaṇaḥ (Bv.) あたりか。

17 Lopez, 66: Buddhahood is attained without interruption.

大八木：仏性を得るのに間断はない (105)

Lopez 氏は出典を比定したものの訳に活かしてはいない。大八木氏も同断。この趣意を裏からいえば、無間三昧＝一切種智性の直後に、仏陀たるものが得られるということ。

18 thob pa dang dmigs pa dang sgrub pa:

Lopez, 66: attainment, object, or achievement

大八木：得ること、可能なこと、成就すること (105)

「可能なこと」は、dmigs pa の訳として可能ではない。Lopez 訳はその点では正しいが、thob pa と sgrub pa が区別されていないといううらみがある。この語について Atiśa 注 (D no. 3823, P no. 5222) に興味深い記述がある。

D316b, P338a: de la bla na med pa zhes bya bas ni (ii) dmigs par bya ba'i yul dang/ (iii) de rjes su sgrub pa'i rgyu dang/ (i) 'bras bu thob pa bla na med pa ste/

そのなか、「無上」によつては、(ii) 認識されるべき対象と、(iii) それに適った (付き従った) 原因と、(i) 得られる結果 (獲得という結果) が、無上 [ということが説かれた]。

項目の順序は違ふが対応は明らかであろう。その中の rjes su sgrub pa という語は PHT の前の箇所では caryā (行) という『心経』の句を注釈する際にも spyad pa ni spyod pa ste/ rjes su sgrub pa'o// 「行」とは実践であり、[教に] 従った実践である。(拙稿 [2019b: 173, 174]) と出ていた。Atiśa 注はチベット語文献であり PHT のチベット語 sgrub に補う形でその語を用いたのであろうから別の箇所での PHT の用法に厳密に従う必要はあるまいが、意味としては関連していよう。かくして、sgrub pa は「achievement」や「成就すること」とは逆の、結果への原因たる実践を意味するというのが、筆者の理解である。



(\*sama) 悟ったことが、「等覚 (sambuddha)」である<sup>19</sup>。

de skad du shes rab kyi pha rol tu phyin pa nyi khri lnga stong pa las/

bcom ldan 'das ji ltar na (ltar na] DT; ltar P) bla na med pa yang dag par rdzogs pa'i byang chub lags/

bcom ldan 'das kyiis bka' stsal pa/ **rab 'byor** chos thams cad kyi de bzhin nyid ji lta bar bla na med pa yang dag par rdzogs pa'i byang chub kyang de bzhin no//

rab 'byor gyis gsol pa/ bcom ldan 'das ji ltar na (na] DP; na chos thams cad kyi ltar na T) chos thams cad kyi de bzhin nyid bla na med pa yang dag par rdzogs pa'i byang chub lags/

rab 'byor gzugs kyi de bzhin nyid nas mya ngan las 'das pa'i bar gyi de bzhin nyid ji lta bar bla na med pa yang dag par rdzogs pa'i byang chub kyang de bzhin no

(katamā ca punar bhagavann anuttarā samyaksambodhiḥ?

bhagavān āha: sarvadharmāṇāṃ tathatānuttarā samyaksambodhiḥ.

subhūtir āha: katamaiṣā bhagavan sarvadharmāṇāṃ tathatā yānuttarā samyaksambodhiḥ?

(bhagavān āha:) yā subhūte rūpasya tathatā (yā vedanāyās tathatā yā saṃjñāyāḥ tathatā yā saṃskārāṇāṃ tathatā yā vijñānasya tathatā, evaṃ yā skandhatathatā yā dhātutathatā yā āyatanatathatā yā pratītyasamutpādatathatā yā pratītyasamutpādāṅgatathatā,) evaṃ yāvad yā nirvāṇasya tathatā sānuttarā samyaksambodhiḥ. (PSP, 4.174)

T no. 223, 8.346a2-7: 世尊。何等是阿耨多羅三藐三菩提。

佛言。一切法如相。是名阿耨多羅三藐三菩提。

須菩提白佛言。世尊。何等是一切法如相。是阿耨多羅三藐三菩提。

佛告須菩提。色如相受想行識如相。乃至涅槃如相。是阿耨多羅三藐三菩提是如相)

zhes gsungs so//

『二万五千〔頌〕般若』<sup>20</sup>に、

「世尊よ、無上正等覚とは何でしょうか。

世尊は言った。スプーティよ、一切法の真如の通りが、無上正等覚の通りである。

スプーティは言った。世尊よ、何が、一切法の真如である無上正等覚ですか。

〔世尊は言った。〕色の真如、乃至、涅槃に至るまでの真如の通り、無上正等覚も、その通りである」

と説かれている。

19 『心経』のチベット語訳では「bla na med pa yang dag par rdzogs pa'i byang chub tu mngon par rdzogs par sangs rgyas so」とある。PHTでは以前にもそのような解釈があったが、ここでも2度、samがsamaと解釈されている。つまり、チベット語訳から導き出されたものではなく梵本に基づいた解釈がなされている。

20 大八木氏は漢訳対応を比定した。

de la bla na med pa'i tshig gis ni (1) sems can thams cad kyi mchog tu gyur pa (pa] T; pas DP) sems che ba nyid yin no// de'i lhag mas (mas] T; ma DP) ni (3) rtogs pa che ba nyid yin no//

(A) sngon byang chub <sup>[T28]</sup> sems dpa'i gnas skabs na thugs la bzhag (bzhag] DP; gzhag T) ste chen po nyid rnam pa de gsum gyi ched du shes rab kyi pha rol tu phyin pa la 'jug pas gsum gyi ched du zhes brjod do//

(B) rdzogs pa'i tshe na ni snga mas 'bras bu spangs pa phun sum tshogs pa dang/ phyi ma gnyis kyis ni 'bras bu rtogs pa phun sum tshogs pa bstan te/ (te/] DP; to// T) ji ltar yul ljongs 'ga'i (ljongs 'ga'i] DP; gzhongs dga'i T) ched du rgyal pos (pos] D; po PT) mchod sbyin byed pa (mchod sbyin byed pa] DP; chas te 'gro ba T) dang/ tha mar yul ljongs (ljongs] DP; gzhongs T) thob pa 'bras bu yin pa de bzhin du/ shes rab kyi pha rol tu phyin pa la brten (brten] DP; kun tu brten T) nas phyin ci log dang bral ba'i phyr dang rtogs pa thob pa'i phyr ro//

そのなか、「無上」という語によっては、(1) 一切の有情のうちの最上の者であるという心大性〔が示される〕。その残り<sup>21</sup>によっては、(3) 証大性〔が示される〕。

(A) 以前の菩薩の状態の時に、心に確立して、その三種の大性((1) ~ (3))のために、般若波羅蜜へと活動するので、三つのためにと述べられる<sup>22</sup>。

一方、(B) 完成した時には、前のもの (= 無上 (anuttara)) によって、結果である断円満 (Cf. (2) 断大性) 〔が示され〕、後の二つ (= samyaksambodhim abhisambuddhāh) によって、結果である証円満 (Cf. (3) 証得大性) が示される<sup>23</sup>。すなわち、ある地域を〔得る〕

21 「無上」は明らかに『心経』の「証得無上正等覚」の中の語であったので、その残りとは、「証得・正等覚」を指すのであろう。後の議論(注23)に関連するので確認しておく。

22 gsum gyi ched du zhes brjod do//

zhes とあるので何等かの引用を示している可能性もあり、その場合「三大性」について説く下記のAAが念頭に浮かんだが、(ii)の回答の続きということであろう(注9, 10も参照)。いずれにせよすでにLopez, 50が指摘したように(拙稿[2019a: n. 49])、この三大性というのは『現觀莊嚴論(AA)』1. 42に説かれているものである。そして、筆者の理解によれば、PHTは、(ii)への回答を、三大性の枠組みを用いて、『心経』の経句と対応させて、回答している。その原文は以下の通り。

sarvasattvāgratācittaprahāṇādhigamatraye/

tribhīr mahattvair uddeśo vijñeyo 'yam svayambhuvām//AA, 1. 42// (兵藤[2000: 380](テキスト), 75(和訳))

なお、上記のuddeśoというのは兵藤訳のとおり「所期」ということで英語ではobject, motive。

また、(1) sems can thams cad kyi mchog tu gyur pa sems che ba nyidの原語はsarvasattvāgratā-cittamahattvaであり、様々に訳されるが、その意味は、一切の有情のうちで最勝の者となろうという決意の偉大性、つまり、成仏への決意ということであろう。この語は本論に4か所出るが、原語が同じであると想定される以上、訳を統一することが望ましい。Cf. 大八木: すべての有情の最高の存在になった者が、大いなる心という性質(大心性)(104)、大八木: すべての有情の最高の存在になった者による大いなる心という性質(大心性)(106)。

23 Lopez, 67: At the time of completion, the former indicates the marvelous fruitional state of abandonment, and the latter two indicate the marvelous fruitional realization.

大八木: 完成した時には、過去によっては〔大断性によって過失の〕結果を離れることを成就し、二つの未来によっては〔大心性・大証性によって菩提の〕結果への到達を成就したことが示された(106)

snga ma と phyi ma に対する大八木訳の「過去」と「未来」という訳は不可であり、全体的にも完全な誤訳。ただ、「the former 前のもの」と「the latter two 後の二つ」とは具体的には何を指すか? 本箇所は「証得無上正等覚」の解説が主題となっている。先には、「無上」と、その残りの語についての言及があった。とすれば、ここも、前のものは「無上」を指し、後の二つは「samyaksambodhim abhisambuddhāh」という2語を指すとみるのが妥当であろう。ちなみに談等には不可思議断、不可思議断現证果(78)という語が見られた。acintyaに対応する語がテキストにあったのかと不思議に思っていたが、Lopez訳の marvelous に引きずられたものであろう。

ために王が祭祀を行い (DP; 武装して赴き T)<sup>24</sup>、最終的には地域を得るという結果があるように、そのように、般若波羅蜜に依拠して、〔行ず・住するのは、〕顛倒を離れるために、そして、証得を得るためにである。

(\*tasmāt tarhi Śāriputra (/tasmāc Ch-) (...) prajñāpāramitā mahāmantra)

shes rab kyi pha rol tu phyin pa nyid gsang sngags so zhes bstan pa'i phyir/ <sup>[P300a]</sup> shā (shā) DP; sha T) ri'i bu de lta bas na zhes bya ba la sogs pa gsungs so//

shes rab kyi pha rol tu phyin pa'i mtshan nyid ni bstan zin to//

gsang sngags ni (a) shes pa yin pa'i phyir dang/ (b) skyob pa yin pa'i (pa yin pa'i] DP; pa'i T) phyir ro// (ro/] DP; te/ T) don gnyis po de nyid (nyid] PT; gnyis D) tshig phyi ma rnams kiyis gsal bar byed do//

般若波羅蜜こそがマントラ (真言、mantra) であると説くために、「舍利弗よ、それゆえ<sup>25</sup>」云々と説かれた。

「般若波羅蜜」の定義はすでに説き終わった<sup>26</sup>。

さらに、ここでは明らかに (A) 菩薩の状態の時と (B) [行を] 完成した時 (= 仏位) が対比されている。その際、従来着目されていないが、断円満 spangs pa phun sum tshogs pa, \*prahāṇasampat と証円満 rtogs pa phun sum tshogs pa, \*adhigamasampat という二つの語が (B) に初出し、またここにもみ登場することが注目される。これは無論、断大性と証大性に関連するが、その完成形態、結果と理解しうる。すなわち、PHT の『心経』注釈の大きな枠組みでいえば、「(iii) 活動の結果は何か」(注9参照) という問いに対する答えがここで与えられていると理解しうる。さらに言えば、本段落末尾の「顛倒を離れるために、そして、証得を得るためにである」とは、順に、断と証を指すことが明らかであろう。以上をまとめてみよう。

・ anuttarām samyaksambodhim abhisambuddhāh の解釈

(A) の時: anuttarām = (1) 心大性; samyaksambodhim abhisambuddhāh = (3) 証大性

(B) の時: anuttarām = (2) 断円満; samyaksambodhim abhisambuddhāh = (3) 証円満

ここでさらに、より広い枠組みで PHT の『心経』解釈をまとめてみよう。PHT はこの前の箇所 (D276b, 拙稿 [2022: 186-187]) で、「自性が空であるから一切法が認識されないようなところ、そのようなところへと、(i) 誰が活動し、(ii) なぜ活動するのか、〔そして、〕(iii) 活動の結果は何か?」という問いを立てていた。その回答は以下の通りと理解しうる。

(i) 「菩提薩埵」(たち) は、般若波羅蜜に依拠 (ā√sri) して住する (vi√hr) ことによって、(ii-1) 「心無罣礙。(無罣礙) 故。無有恐怖。遠離顛倒夢想。究竟涅槃。」(= 断大性) と (ii-2) 「三世諸佛〜」(= 心大性、証大性) という三大性のために活動する。そして、「(iii) 活動の結果」も「三世諸佛〜」という同じ経句によって示されているが、それは、断円満 (断の完成) と証円満 (証得の完成) である。これが PHT が『心経』に読み込んだ「菩薩が目指すもの」だというのが、筆者の理解である。

なお、三大性のうちの心大性の完成として言及されてもよいはずの「心円満」という語は PHT には出ないが、おそらく心 citta とは成仏への決意であるので成仏してしまえばそれはなくなるから完成もないということであろうか。

24 mchod sbyin byed pa] DP; chas te 'gro ba T

DP と T に、これまでとは異なり伝承の相違では片づけられない大きな相違がある。chas pa には様々な梵本が想定され、「行く」の意味もあろうがそれだと続く 'gro ba と重複する。しかしこれは sannaddha の訳でもあり得るので、その意味で理解した。また、この場合、T の読みのほうが文脈に即するようである。なお、『現觀莊嚴論』に説かれる三大性に絡めて領土の征服というたとえに言及する注釈者もいるようである。(田中 [2014: 67])。

25 『心経』本文に対する興味深い異読が見いだせる。『心経』のチベット語訳には AB の 2 系統があるが、ここで舍利弗への言及があるのは B のみである。また、Conze [1967: 152]、白石 [1939 (1988: 524)] によれば、サンスクリットの異読として tasmāt tarhi Śāriputra と読む写本もある模様。ただ、PHT に tarhi まで読み込む必要があるかどうか。なお、漢訳で「知」に相当する語は本稿の範囲外の後の箇所注釈されている。

26 Cf. 拙稿 [2019b: 182-183, n. 28].

「マントラ (mantra)」とは、(a) 知 (\*manana) であるから、そして、(b) 守護 [するもの] (\*trāṇana) であるから<sup>27</sup>。その同じ二つの<sup>28</sup> 意味は、後の諸の [経] 句によって、明らかになる。

chen po [po] D; mo PT) ni khyab pa dang ldan pa'i phyir ro// khyab pa yang dus la khyab pa dang yul la khyab pa [pa] DT; pa dang P) ste/ 'di ltar [ltar] DT; ltar na P) 'di ni chos thams cad dang dus thams cad las (*read* la (?)) ma log par 'jug pa yin no// 'dis ni dbang phyug la sogs pas [pas] DT; pa P) byas pa'i sngags (sngags] PT; gsang sngags D) las 'di bye brag tu bstan pa yin no//

[[大いなるマントラ (大真言)] という経句の] 「大」とは、遍満を有しているから<sup>29</sup>。遍満とはさらに、(a) 時の遍満と、(b) 対象の遍満である。すなわち、これは、(b) 一切法に対して、(a) 一切時に、颠倒なく活動する。これ (= 「大」という語句) によって、自在天 (\*īśvara) などによって作られたマントラ<sup>30</sup> から、これ ([心経] のマントラ) を区別して示す。

**rnam par** <sup>[D279a]</sup> **sngang mdzad mngon par rdzogs par byang chub pa** las ji skad du/

dus gsum dag las shin tu 'das// brten (brten] DT; rten P) nas 'byung ('byung] DP; byung T) ba'i (ba'i] D; ba P, bar T) srid pa yin//

mthong dang (dang] PT; nas D) ma mthong 'bras bu ste// yid dang ngag dang lus *las* (las] em.; la DPT) srid// (1)

'bras bu bskal pa gcig gi grangs// 'jig rten rnams kyi (kyi] T; kyis DP) yin par bshad//

gsang sngags 'bras bu bskal pa las// 'das par rdzogs sangs rgyas kyis bshad// (2)

sangs rgyas drang srong chen po dang// rgyal sras rnams kyi ting nge 'dzin//

mtshan ma rnams (rnams] DP; rnam T) spangs dag pa yin// 'jig rten rnams kyi mtshan mar <sup>[T29]</sup> bcas// (3)

rnam par smin pa'ang (rnam par smin pa'ang] DT; rnam smin pa 'ang P) 'dir smin pa// las rnams kyis (*read* kyi. Cf. MVA below) ni 'bras bu thob (thob] T; 'thob DP) //

gang gi tshe na grub pa thob// de yi tshe na las rnams bzlog// (4)

sems ni rang dngos med phyir dang// 'bras bu rgyu (rgyu] DT; rgyun P) rnams spangs phyir ro//

27 詳細は拙稿 [2019c: 12-13] を参照。

28 大八木: 「その二番目の意味は」(106) は、誤り。gnyis po を gnyis pa と勘違いしたのであろう。

29 大八木: 「満ちることと持てることのためである」(106) は誤り。~dang ldan pa で「~を持つ」と訳す。逆に、「持てること」とは何であり、その説明はどこにあるのか?

30 sngags] PT; gsang sngags D。マントラの訳としてはいずれも可能であるが、ここでは世間的なマントラを指すので、PHT (コロフォンで述べられるようにヴィマラミトラ自身もこのチベット語訳者の一人である) は出世間のマントラと区別するためにここでは sngags とのみ訳したとみて、PT の読みを採用した。

las kyi skye ba rnams las thar (thar] PT; kyang D)// skye ba nam mkha' lta bu yin// (5)

(MVA, D209a4-7, P173b8-174a4:

dus gsum las ni shin tu 'das// rten cing 'brel pa las byung ba//

mthong dang ma mthong 'bras bu can// ngag yid lus las byung ba'o// (1)

'jig rten pa yi 'bras bu'i tshad// bskal pa gcig tu bshad pa yin//

yang dag rdzogs pa'i sangs rgyas kyi// gsang sngags 'bras bu bskal pa 'das// (2)

sangs rgyas drang srong chen po dang// rgyal sras rnams kyi ting 'dzin ni//

mtshan ma med cing dag pa'o// 'jig rten pa yi mtshan mar bcas// (3)

rnam par smin pa 'di nyid la// las kyi 'bras bu smin 'gyur ba//

nam zhig dngos grub thob pa na// de tshe las kyang ldog par 'gyur// (4)

sems ni ngo bo nyid med phyir// rgyu dang 'bras bu rnams spangs shing//

las dang tshe las rnam grol ba// nam mkha' lta bur 'gyur ba yin// (5)

『大日経』 T no. 848, 18.33c17- (26) :

超越於三時 衆縁所生起

可見非見果 從意語身生 (1)

世間之所傳 果數經一劫

等正覺所説 眞言過劫數 (2)

大仙正等覺 佛子衆三昧

清淨離於想 有想爲世間 (3)

從業而獲果 有成熟熟時

若得成悉地 自在轉諸業 (4)

心無自性故 遠離於因果

解脫於業生 生等同虛空 (5)

zhes gsungs so//

『Vairocanābhisambodhi (大日経)』<sup>31</sup> に、

〔出世間のマントラは<sup>32</sup>、〕三世を超越しており、縁起して生じたものであり、

31 Lopez 氏は無言だが、大八木 [2002: (33) ff.] は蔵・漢の対応を比定・提示し、談等は漢訳を指示する。『大日経』「秘密曼荼羅品」、Tib, Ch.13。

32 ヴィマラミトラによる本箇所引用の趣意にそぐうものであるので、大八木氏とともに、この主語を補う。大八木氏のこの箇所に対する理解は同 [2002] での『大日経』との比較、ブツダグフヤ (Buddhaguhya) の『大日経広釈』の参照を踏まえた、優れたものである。なお、直接的には主語はこの 2 偈前に 'jig rten 'das pa'i sngags rnams kyi// と出ている (MAV, D209a3)。他方 Lopez 氏はこのような手続きを踏まえないために引用の趣意・主題を見失い「縁起生」を主語とし、Lopez, 67: The state of dependent arising is far beyond the three times. と訳してしまっているが、誤り。

見られ・見られない結果を有し<sup>33</sup>、意・語・身から生ずる<sup>34</sup>。(1)

「世間的な〔マントラの〕結果は一劫である。

〔他方、出世間の〕マントラの結果は劫を超越している」と、正等覚は説いた<sup>35</sup>。(2)

仏たる大ムニと勝者の子（菩薩）らの三昧は、諸の特相を離れ、清浄である。

〔一方、〕世間的な者たちの〔三昧は〕特相を有している。(3)

〔通常は〕異熟もまたここにおいて成熟する。すなわち、諸の業の結果を得る。( / まさにこの異熟（≡五蘊）において、業の結果は成熟する。)

〔しかし、〕成就（siddhi）を得た時、その時には諸の業は退けられる<sup>36</sup>。(4)

なぜなら、心は自性がないから、そして、原因と結果を断じているから。

業と生起を超越しており、〔心の〕生起は虚空のごとし。(5)

と説かれている。

(mahāvīdyāmantra 'nuttaramantra 'samasamantraḥ)

(a) 'dis ('dis] T; 'di ni D, 'dis ni P) rig cing shes pa'am (b) 'dod pa grub pa thob pas rig pa'o// de rig pa yang yin la (yin la] DP; yin T) chen mo yang yin pas rig pa chen mo'o// rig pa chen mo (mo] DP; po T) nyid gsang sngags yin pas rig pa chen mo'i gsang sngags so//

de bas (de bas] DP; des T) na bla ma shin tu <sup>[P300b]</sup> mchog tu gyur pa 'di las gzhan med pa'i phyir bla na med pa'i gsang sngags so//

'di dang mnyam pa'am 'dra ba yod pa ma yin pas (pas] DP; te T) mi mnyam pa ni (ni] T; de ni

33 『大日経広釈』(D nyu 207b, D tu 62a)によれば、見られる結果とは、人や天などの成就 (lha dang mi la sogs pa 'grub pa)、つまり人天に生まれるということ。見られない結果とは、涅槃。出世間のマントラは前者のみならず後者の結果も有するという。翻訳に際して、そこに引用された文献の注まで参照するときがないが、ブツグフヤは本PHTの作者であるヴィマラミトラの師とされる伝承もあり密接にかかわるので、ここにその注釈を援用することも許されよう。なお、「ブツグフヤの註釈のチベット語訳には、シヨンスベル (gZon nu dpal) が「改訂」した、いわゆる「再治本」とシヨンスベルの手が入っていない、いわゆる「未再治本」が存在する」(種村 [2011: 77])。冒頭に記載した nyu 帙の箇所は後者に属し、tu 帙の箇所が前者に属す。

34 Lopez, 67: The seen and unseen fruition exists in the body, speech, and mind.

大八木：見えるものと見えないものとの果であり、意と語と身から生じたものである (107)

大八木訳は前半は誤り。マントラ=果ではないから。MVAには明確に can (～を有する) とあるが、それが無いPHTも Bv. で読める。Lopez 訳は全体的に誤り。

35 Lopez, 67: It is explained by the world that fruition is calculated [to occur] in one aeon. It is explained by the complete Buddha that the fruition of secret mantra is beyond aeons.

大八木：果は一劫の量であると諸々の世間は説かれ、

真言の果は劫を超えると等覚者は説かれた。(107)

先行訳は世間・the worldを主語とみているが『大日経広釈』は世間的な神の成就する結果は一劫の期間存続することだと注釈している (D207b) ので、筆者は正等覚を主語とみる。ただ、この偈頌に関しては漢訳の読みも含め、さまざまな解釈の可能性があろう。

36 『大日経広釈』によれば、三昧などの成就を得る時には、業の異熟はその成就によって退けられて、結果を成熟させずに退けるという意味。これは一つの解釈に過ぎないであろうが文脈にそぐうと思われる。一言でいえば、マントラや三昧の成就は、業の因果を超えるということであろう。MAVに沿った訳も () 内に示した。

Lopez, 67: The fruit ripens here; they attain the effect through karma. When they attain siddhis karma is overturned ...

大八木：この異熟として熟した〔ならば〕諸々の業によって果を得、

いつでも成就を得るその時に、諸々の業を退転する。(107)

DP) nam mkha'o// de dang mnyam pa'i phyir mi mnyam pa dang mnyam pa'o// byang chub sems  
dpa'i sde snod las kyang/ mi mnyam pa dang mnyam pa'i tshig bcom ldan 'das nyid kyis gsungs  
so//

## (i) 知の意味のマントラ

(a) これ (明呪 vidyā) によって (\*anayā) [人は] 明知して知る、あるいは、(b) [こ  
れによって] 願望の成就を得るので、「明呪 (vidyā)」である<sup>37</sup>。それは「明呪」でもあり、  
「大」でもあるので、「大明呪」である (大いなる明呪)。大明呪こそがマントラであるの  
で、「大 [いなる] 明呪 [たる] マントラ」である<sup>38</sup>。

それゆえ、これよりも別な、無上で極めて最勝なものは存在しないので、「無上なマン  
トラ」である。

これと等しいあるいは似ているものは存在しないので、「無等」であって、すなわち虚  
空である。それ (無等 = 虚空) と等しいから、「無等等」である。『菩薩藏』にも、「無等  
等」という語句が、世尊自身によって説かれている<sup>39</sup>。

**de bzhin gshegs pa'i gsang ba bsam gyis mi khyab pa bstan pa las kyang/**

ci (ci) D; ji PT) tsam du ni dpe 'ga' zhi//

sangs rgyas chos la byed na ni//

de ni sangs rgyas rjes mthun (mthun) DP; 'thun T) min//

de (de) D; des PT) ni rgyal ba smad pa yin//

37 Lopez, 67: Because they know and understand this, or they achieve the desired feat, [the sūtra says] *knowledge*.  
大八木: これ「明」で、知ること、あるいは欲するものを成就することを得ることによって、「明」で  
ある。(107)

先行訳の構文理解は誤り。vidyā は karaṇa, instrument だというのが PHT の解釈のポイント。さらに、(a)  
は vidā jñāne (Dhātupāṭha (DhtP), II.55) を前提としている。『二卷本』(no. 296) にも引用されており、そ  
の和訳に際して石川氏が指摘している通りである。他方、(b) は DhtP, VI.138: vidL lābhe を前提として  
いるのであろう。ヴィマラミトラは先行研究とは異なり Dhātupāṭha に対する明らかな知も持っていたよう  
である。Cf. 拙稿 [2016: 13.fn. 90].

38 Lopez, 67: Because the great knowledge itself is a secret mantra, [it says] *the secret mantra of great knowledge*.

大八木: 「大明」たる性質が真言であることで「大明呪」である。(107)

mahāvīdyā-mantra を Kdh. で解釈している。Lopez 訳が適切。

39 Lopez, 68: In the *Bodhisattvapiṭaka*, the Bhagavan himself uses the words “equal to the unequalled.”

大八木: 『菩薩藏』にも、

「無等と等しい言葉は、世尊そのものによって」と説かれている (107-108)

Lopez 訳が妥当。大八木訳がなぜ不可であるかということ、そのように読むためにはテキストは kyis  
<zhes> gsungs so となければならぬから。

『菩薩藏』には数か所でこの語が出るが、虚空と並んで出る以下を挙げておく。

T no. 316, 11.795c13: 佛身無為不墮諸數。如虚空身。無等等身。

T no. 312, 11.709a9: 是法歸趣。如來身者即虚空身。無等等身。

『心経』の「無等等 (asamasama)」という語にはさまざまな解釈があるが、ヴィマラミトラは、「無等」  
(=虚空) に「等」しい (似ている) と解釈している。

ちなみに、PHT はそのはじめのほうの部分でも『菩薩藏』を引く。それについて筆者は拙稿 [2019a:  
n. 34] にて「出典不明」といったが、大八木 [2020b] が藏・漢の対応を比定した (Tib. H (Lhasa, ACIP)  
56, vol.37, 71b4-6; T 11.800a7-10)。己の不明を恥じ、大八木氏の慧眼に敬意を表したい。また、関連して、  
拙稿 [2022: 185, fn. 8] の。「(大八木訳は段落分けをしていない点は不適切であるが D を採用した点では  
正しい)。」という記述の中、「D」を「P」と訂正したい。

sangs rgyas chos dang mnyam pa gang//  
 dpe ni de la gcig yod pa//  
 nam mkha'i khams su bstan pa yin//  
 gang gi tshad ni 'ga' na'ang (na'ang] T; yang DP) med//  
 (yāvatī upamāḥ kāścid buddhadharmeṣu kurvate |  
 buddhasya nānūrūpās tā abhyākhyāsyanti taṃ jinaṃ ||  
 eka tatropamā bhūtā buddhadharmeṣu yā samā |  
 ākāśadhātunirdiṣṭo pramāṇam yasya na kvacit ||<sup>40)</sup>

ces bya ba la sogs pa gsungs so//

『Tathāgatācintyaḡuhyānirdeśa (如来不思議秘密 [経])』にも、

「なんらかの諸の譬喩が、諸の仏法 (\*buddhadharma、仏陀の特性) に対してなされたその限り (仏法に対してどんな譬喩がなされたとしても)、それらは、仏にふさわしいものではない。それらは [かえって] かの勝者 (仏) を誹謗するであろう。

諸の仏法と等しい譬喩は、そのなか、一つある。[それは、] その際限はどこにもないところの虚空界 (\*ākāśadhātu) として示された [譬喩] である<sup>41)</sup>

と説かれた。

nam mkha' dang mnyam pa 'dis ni khyab pa dang/ thogs pa med pa dang/ rgyun ma chad pa la sogs pa blta bar bya'o//

de dag gis ni (i) shes pa'i don bstan to//

40 本箇所は梵本写本が存在する箇所であり、伊久間洋光氏により、氏による梵本校訂 (博士論文所収)、和訳と写本の当該箇所をご提供いただいた。記して謝意を表す。その他の書誌は大乗經典研究会 [2021]。やはり蔵訳のみからだと細かいニュアンスはわからないものである。いくつか BHS 形あり。蔵訳にのみ基づく筆者の当初の訳は以下の通り。

「なんらかの譬喩が、仏法 (\*buddhadharma) に対してなされたその限り (仏法に対してどんな譬喩がなされたとしても)、それは、仏への随順ではない。それは [かえって] 勝者 (仏) への誹謗である。仏法と等しい譬喩は、そのなか、一つある。[それは、仏法を、] その際限はなにもないところの虚空界 (\*ākāśadhātu) として示すことである。」

41 趣旨は、仏法 (仏陀の特性) に対しては、[無際限な] 虚空に等しいというのが唯一認められる譬喩であり、それ以外はいかなる賛嘆でも、かえって誹謗になるということ。

Lopez, 68: "How does one exemplify the Buddha and the teaching? The Conqueror declared that nothing approximates the Buddha; there is one example of what is equal to the Buddha's teaching. He taught that it is the measureless realm of the sky."

大八木: ただわずかな譬えに、仏が法を説く時、その仏に随うものはない [という]。それは勝者を誹謗するものである。仏は法と等しいものである。譬えがそれについて一つある。[それは] 虚空界として示したのであり、正しい認識手段は少しも無い。(108)

Lopez 訳は方向性は間違っていないが不正確。大八木訳は意味不明。

さて、大八木訳 (2016) は、同経に「この文章そのものは」「ない。取意か」と指摘する。大八木 [2020b] ではその自身の指摘を訂正し、蔵・漢の対応箇所を指摘しているが、漢訳についてはすでに談等 [2005: 99] によってその 15 年も前に出典が指摘されている。

T11, 718b1-4:

若人欲以譬喩法 喩其無邊諸佛法  
 彼佛不可隨相知 是人返招誘佛罪  
 唯其一法可爲喩 與諸佛法等無異  
 所謂周廣太虚空 分量邊際不可得

なお、大八木氏が指摘するように、この2偈はSPTにも引かれる (D17b.そこでは2偈頌多く引かれている)。



〔仏法/マントラは〕“虚空と等しい”というこのことによって、遍満し、妨げがなく、断絶しない、など〔の意味〕が見られるべきである。

それら〔の経句〕によって、〔マントラの〕(i) 知の意味が説かれた。

(以下続く)

#### 付録：SPT の引用文献に対する誤訳を正す

本論文の主題である PHT に密接に関連する同じヴィマラミトラの著作として『七百頌般若注 (SPT)』があるが、それに対する研究には誤りが多い。煩を厭って最後の例以外は先行訳による具体的な誤訳は示さず所在のみを示し、原文と筆者の訳を挙げることでその誤りを正しておきたい。その他、拙稿 [2022: 194-198] を参照。

例 1.

SPT: nyan thos byang chub tu yongs su 'gyur ba gang yin pa de ni ngas rnam grangs kyis byang chub sems dpa' yin par bstan te/

「私は異門によって (ある観点から) 彼らを菩薩種姓の者であると言う」(Cf. 大八木 [2020b: 5])

これはいわゆる廻向菩提の声聞を指す。出典は SNS, VII.16 (袴谷 [1994: 168-169])。

例 2.

SPT: **zla ba sgron ma** las kyang/

gzugs su ma yin mtshan nyid chos min par//

rgyal ba'i sras 'di sangs rgyas rjes su dran//

gang du sems med 'gro zhing rgyu ba med//

de ltar de ni sangs rgyas rjes su dran//

zhes gsungs so//

『『月灯三昧〔経〕(SR)』にも、「この勝者の子は、色形としてではなく、特徴の法〔として〕ではなく、仏を隨念する。すなわち、そこ (仏) において (\*yatra) は心がなく動きやうごめきがないと、そのように、彼は仏を隨念する。」と説かれている」(Cf. ibid., 3)

SR 第 4 章は buddhānusmṛtiparivarta 「仏隨念品」と名付けられるが、対応句は見いだせなかった。

例 3.

SPT: 'phags pa dkon mchog sprin las kyang sman pa snying rje can bzhin no zhes bstan to//

『聖宝雲〔経〕』にも、「〔仏は〕悲を有する医者のごとし」と出ている。(Cf. ibid., 2)

筆者としても出典不明であるが、たとえば同経の T16.261c には諸佛如來が (大) 醫王に例えられている。仏が医者や医者の王に例えられるのは常識。

例 4.

SPT は『宝篋經』(T no. 462) を引用する。大八木 [2020b: 3] はそのチベット語と漢訳のロケーションを比定した。しかし、氏は参照しないがすでに五島 [2014: 31] に經典自体の対応箇所に対する正確な訳がある。引用箇所が長いのでいくつかに対するコメントのみ。

- ・ rin po che'i za ma tog (大八木 [2020b: 3]) > rin po che'i zam tog (P ではツェックが見ずらいのは確かだが、D と『中華大藏經』にはこうある)
- ・ bcom ldan 'das 'od kyi tog gis/ 'phags pa 'jam dpal la bka' stsal pa (ibid., 4: 世尊は光の旗によって聖マンジュシュリーに告げた) > 光の旗によって告げるとはなんとも詩的な情景であるが、'od kyi tog は世尊の名前であるので、「世尊 Prabhāketu は、」と訳す。
- ・ shes bzhin du (ibid., 4: 知るように) > 知りつつ (\*sāmprajānat)。いわゆる正念正知の正知。
- ・ bdag tu sgro 'dogs par mi byed/ sangs rgyas su sgro 'dogs par mi byed/ (ibid., 4: 私は誤った断定をせず、ブッダは誤った断定をせず) > 我(アートマン)を増益せず、仏を増益せず
- ・ (nye bar ma yin) bden de bzhin gshegs pa la bsnyen bkur byed pa yin no (ibid., 4: 真実は如来に親近するものである) > 上記の大八木氏のテキストにある「bden/བདེན་」とは氏によるチベット文字の読み間違いで、DP には、「pa de ni/པ་དེ་ཉི་」(~な者、彼は)とある。
- ・ ちなみに、類似する例で思い出す面白いものに池田 [2008: (6) - (7)] がある。Tarkajvālā 第4章の一節を取り上げるにあたり、氏は mthar thug sangs pha'ang 'di ma yin// というテキストを提示し、「究極的には仏の父はない」と訳している。奇怪な一文だが、何のことはない、pha (父) というのは氏によるチベット文字の読み間違いであり、原文には mthar thug sangs pa'ang 'di ma yin// とある。Eckel [2008: 142] : (but) he has not reached final awakening. が正しい訳。同論文のその他の箇所の吟味は別途機会があれば行いたい、いずれにせよ、翻訳に際してチベット文字をきちんと読むということの必要性が知られよう。
- ・ 安慧の『中論』注釈書(『大乘中観釈論(釈論)』(T no. 1567))の書名について  
これに関連して、本稿脱稿前に安井 [2020] に気づいた。安慧(Sthiramati)による『中論』に対する漢訳にのみ残る注釈(『釈論』)を取り上げて他の注釈と比較するというものである。同論文は安慧の同論を紹介する中でターラナータ(Tāranātha)の『インド仏教史』(Schiefner [1868] ed.)がそれに言及しているとし、以下を指摘している(最初の一節のみ取り上げる)。

Schiefner [1868: 107.5-6] : de yang slob dpon blo gros brtan pas dbu ma rtsa ba'i dgongs pa rnam rig tu 'grel pa'i rnam bshad la/...

氏はこれを、「さらにまた阿闍梨耶 Sthiramati (blo gros brtan pa) による dbu ma rtsa ba'i dgongs pa rnam rig tu 'grel pa'i rnam bshad (\*Mūlamadhyamakāsandhīnirmocana-vyākhyā) に

ついて、…」と訳し、\*以下を安慧の注釈書の書名と理解する(安井[2020:208])。

しかし、一見してこれは奇怪な原語想定であり、筆者はただちに別の可能性を思いついた。まず、dgongs pa nram rig tu 'grel pa が SNS を想起させるのは確かだが、SNS の書名は dgongs pa nges par 'grel pa と、異なっている。ただ、そのような想定は 150 年以上前の Schiefner [1869] にまで遡るようである。Schiefner [1869: 137] はその独訳においてこれを Madhjamikamūlasandhinirmotschanavjākhjā (sic. 特殊なローマナイズ) と想定し、脚注に SNS のタイトルとの関連を指摘する。寺本 [1928: 206] も Madhyamikamūlasandhinirmocanāvyaḥkhyā (sic.) と想定し、「根本中道思惟分別疏釈」と訳す。

他方、筆者の理解は、nram rig tu を「〔唯〕識の〔教義〕において・観点で」と読むというものである。この場合、nram rig を nram rig pa=sems tsam pa で理解することとなる。検索したところ意外に nram rig tu の用例はほほないのだが、例えば Schiefner [1868: 103.6-7] には nram rig dang rtog ge'i bstan bcos thor bu (〔唯〕識と論理 (= 因明) の小論 (Cf. 寺本 [1928: 199]) という表記があることに気づき我が意を強くしていたところ、ターラナータ同書に対する英訳 Chattopadhyaya [1970] が当該箇所を以下のように訳していたことに気づいた。

ibid, 187: In this [controversy], ācārya Sthiramati wrote the work explaining the *Madhyamakamūla* from the standpoint of vijñāna.

細かい表記は別にして、常識的にはだいたいこの線で読むのが自然。さらに調べたところ、しばらく後に出る護法 (Dharmapāla) の伝記の項目で、決定的な用例に出くわした。

Schiefner [1868: 124.14-15] : des dbu ma bzhi brgya pa la nram rig tu bkral pa'i 'grel pa mdzad

これについて寺本同書 232 は「彼は中道四百頌に付て「唯識疏」を作る」と訳すが、Chattopadhyaya 同書 213 は、「He composed a commentary on the *Madhyamaka-catuḥśatikā* from Vijñāna-vāda standpoint.」と訳す。無論これは『四百論』に対する注釈たる護法の『大乘広百論釈論』(T no. 1571) を指すが、Chattopadhyaya 氏が適切に理解したように、ターラナータはここでその書名を指摘しているのではない。上記は「彼 (= 護法) は『四百論』に対して〔唯〕識の観点で注釈した (bkral pa/ba) 注釈書 ('grel pa) を作った」と訳すのが自然。さらに、この箇所については Schiefner 氏も正しい方向性で理解していたことを指摘し、氏の名誉回復を図りたい(下線部筆者)。

Schiefner [1869: 161] : Er verfasste einem Commentar zu dem 400 Śloka unfassenden *Madhjamika-Sūtra* (sic.) in der Auffassung der Idealisten ...

チベット語文献であるから nram rig に厳密に vijñapti を想定しなくともよく、nram rig tu は「唯識の観点で」「識論者の観点で」と訳せばよい。要するに、ターラナータによる安慧と護法の上記の二つの著書に対する記述のポイントは、中観の論書を唯識の観点から注

釈した注釈書だと指摘することにある。その他の用例も探せば見つかるかもしれないが、傍論は十分であろう。ここで件の一節に対して安井氏の訳を見た後に筆者がただちに思いついた訳を原文とともに記せば以下のとおり。

de yang slob dpon blo gros brtan pas dbu ma rtsa ba'i dgongs pa mam rig tu 'grel pa'i nram  
bshad la/...

「さらに、安慧先生が『根本中』(Mūlamadhyamaka = 『中論』)の意図(dgongs pa、思想)を〔唯〕識〔学派〕の観点で注釈した('grel pa/ba)注釈書(bshad pa)について、」

結局のところ Chattopadhyaya 氏による 50 年前の理解が正しかったというだけの話なのだが、『釈論』研究への機運も高まっているとのことなので、今後その書名についての荒唐無稽な想定が拡散されないようこの機会にその誤りを正しておくことも無意味ではあるまい。

これに関連して、本稿脱稿後、ある機会を経て、西山・早鳥 2020 に気づいた。これは清弁 Bhāviveka の Prajñāpradīpa (『般若灯論』 PPr) に対する観誓 Avalokitavrata の注釈(PPrT)のテキスト校訂と和訳の一環である。テキストにおいて前者(pratika)は太字で示されている。その中で以下のようにある(チベット語の表記をワイリー方式に変更して引用する)。

テキスト (p. 230) と fn. : 「**lam ni thob pa'i thabs shes pa'i**<sup>xvii</sup> **tha tshig go**<sup>xviii</sup> zhes bya ba smras te/

fn. xvii PPrT shes pa'i: PPr zhes bya ba'i]

和訳 (p. 224) : 「道は、獲得の方便である知の意味である<sup>16</sup>」と〔師 Bhāviveka は〕語ったのであり…」

fn. 16: 「PPrT に基づいて「道は獲得の方便である知の意味である」と訳したが、PPrT に「知 (shes pa'i)」とあるのに対して、PPr では「という (zhes bya ba'i)」となっており、こちらに基づけば「道は獲得の方便という意味である」となる。漢訳(大正 30. 126b16-17: 如是中道名為得証実相方便)にも「知」にあたる語は見出せない。…」

他方、筆者の理解によれば、PPrT も「道は獲得の方便という意味である」としか訳せない。簡単にいえば、shes pa は「知」を意味する語ではなく梵本の iti を訳したものだというのが、筆者の理解である。根拠は以下の通り。

zhes/ces bya ba'i tha tshig go/(ste/) というのが、ity arthaḥ の通常の翻訳である。しかし、その省略形である zhes(ces) pa'i tha tshig という用例もしばしばみられ、本 PPrT の範囲内でも、少なくとも 2 例ある。

D Zha 46a7: gzugs ni rgyu med par/ thal bar 'gyur te zhes bya ba ni 'thad pa med par zhes pa'i

tha tshig go//

D Wa 30b1: 'brel bar 'byung ba'i don to zhes 'grel pa byed pa nyid zer ro zhes pa'i tha tshig go//

他方、本箇所においては zhes の直前の語が s であるので、zhes が shes となったとみられる。たしかに『藏漢大辞典』は、zhes の項目において、知の意味の shes pa との混同を避けるため sa の後においても zhes を用いることもある（为使不与作知道解的 shes pa 混淆，亦用于 sa 字尾后面，（表明引出其他词句））と言っている。しかし、zhes とも（亦）表記すると言っているのもあって、必ずそうだと言っているのではない。イエシュケの文法書には ces の項目で、also shes and zhes とある。実際、他文献であるがこの文脈で shes が用いられる用例がいくつも存在する。

D Tshu 28b7: de bsod snyoms las phyir bzlog pa zhes bya ba ni phyir bzlog par gyur ba ste/ phyi dro'i zas kyi dus su bsod snyoms mi byed par shes pa'i tha tshig go//

「彼は托鉢から戻る」とは、戻った、すなわち、午後には托鉢をせずに、という意味である (shes pa'i tha tshig go)。

D tsu 192a3: dus shes bya ba ni …

「時」とは (shes bya ba ni)、…

さらに言えば、zhes と shes の異読は諸版本に頻繁に見出される。

そもそも、当該箇所は観誓の PPrT が清弁の PPr を pratika として引用している箇所にすぎない。そして、後者には、上掲の fn. xvii が示すように、lam ni thob pa'i thabs zhes bya ba'i tha tshig go// とある。もし清弁の PPr に対して観誓の PPrT が注釈や新たな解釈を提示したのであれば、pratika の枠外で行い、さらなる説明を加えたはずであろう。すなわち、観誓が西山・早鳥氏の訳したような理解をしていたのであれば、そのチベット語としては、たとえば以下のような形が想定される。

**\*lam ni thob pa'i thabs shes/zhes bya ba'i tha tshig go** zhes bya ba smras te/ shes pa zhes bya'i tha tshig ste(/don te)/ (「道は獲得の方法であるという意味である」と〔清弁〕は述べた。すなわち、知という意味であって、…)

逆に、pratika に「知」という意味の語句があったのであれば、観誓が見ていた清弁のテキストに異読があったということである。

ちなみに、単なる思考実験であるが、観誓が清弁の PPr (pratika) に shes pa (知) という意味を読み込んだ (pratika を意図的に改変した) と仮定して、かつ、X'i tha tshig go という用例が許容される (ほとんど見かけないが) と二重に仮定してみよう。その場合でも、lam ni thob pa'i thabs shes pa'i tha tshig go は、西山・早鳥氏のように「道は獲得の方便である知の意味である」とは読めない。その場合は普通は「道とは獲得の方法を知りという意味である」と読む。逆に、両氏の日本語に対応するチベット語を上記の二重の仮定のもとで想定してみると、\*lam ni thob pa'i thabs <ste(/)> shes pa'i tha tshig go あたりとなる。

いずれにせよ、上記の用例採集等—結局のところサンスクリットやチベット語は我々にとっては外国語なのだから一言一句についてこの作業を必ずなすべきだと思うのだが—に基づいた筆者の見解では、両氏による PPt 当該箇所翻訳は、誤り。

## 略号

- AA (『現觀莊嚴論』) : *Abhisamayālaṃkāra*. See 兵藤 [2000].
- AAA: *Abhisamayālaṃkārarālokā*. U. Wogihara ed., Tokyo: Sankibo Buddhist Book Store, 1932, 1973.
- ACIP: Asian Classics Input Project.
- AKVy: *Abhidharmakośavyākhyā*. U. Wogihara ed., Tokyo: 1932-1936; repr. Tokyo: Sankibo Buddhist Book Store, 1971.
- DBh (『十地經』) : *Daśabhūmikasūtra*. K: R. Kondo ed., *Daśabhūmīśvaro nāma Mahāyānasūtram*. Kyoto: Rinsen Book. Co., 1983.; R: J. Rahder ed., *Daśabhūmikasūtra et Bodhisattvabhūmi. Chapitres Vihāra et Bhūmi*. Paris: Paul Guethner, 1923.
- MVA (『大日經』) : *Mahā-Vairocanābhisaṃbodhi*. D no. 494, P no. 126.; 『大毘盧遮那成佛神變加持經』 T no. 848.
- Lopez: *Elaborations on Emptiness: Uses of the Heart Sutra*, Donald. S. Lopez, Jr., Princeton: Princeton University Press, 1996.
- Negi: J.S. Negi. *Tibetan-Sanskrit Dictionary*. 16 Vols., Sarnath, Varanasi: Dictionary Unit Cnetral Institute of Higher Tibetan Studies, 1993-2005.
- PHT: Vimalamitra (tr. Vimalamitra, Nam mkha', Ye shes snying po), *'phags pa shes rab kyi pha rol tu phyin pa 'i snying po 'i rgya cher bshad pa (\*Āryaprajñāpāramitāhṛdayaṭīkā)*. D no. 3818; P no. 5217; T (TBRC Core Text Collection 7, TBRC Resource ID: W23159 (<https://www.tbrc.org/#!rid=W23159>), Bir, Himachal Pradesh: D. Tsondu Senghe, 1979., 33p.; 8x44cm).
- RGV: *Ratnagotravibhāga*. E.H. Johnston ed., Patna: Bihar Research Society, 1950.
- SNS: *Samdhinirmocanasūtra*. É Lamotte ed., *Samdhinirmocanasūtra: L'explication des Mystères*. Louvain: Université de Louvain, 1935.
- SPT: Vimalamitra (tr. φ), *'phags pa shes rab kyi pha rol tu phyin pa bdun brgya pa 'i rgya cher 'grel pa (\*Ārya-Saptaśatikāprajñāpāramitāṭīkā)*, D no. 3814 (ma 6b1-89a7), P no. 5214.
- SR (『三昧王經』) : *Samādhirājasūtra*. see Dutt 1941.
- 大八木 : 大八木隆祥「ヴィマラミトラ 般若心經広大註」『集成』69-122.  
『集成』: 渡辺章悟・高橋尚夫編『般若心經註釈集成<インド・チベット編>』東京: 起心書房, 2016.
- 『大日經広積』: Buddhaguhya. D no. 2663b.
- 談等 : 談錫永 刘卓衡译「圣般若波罗蜜多心经广释 (无垢友尊者造)」。In: 談錫永等著譯『心经内义与究竟义』北京: 华夏出版社 2005 (2010 再版), 52-84.
- 『二卷本』: 石川美恵『Sgra sbyor bam po gnyis pa 二卷本訳語釈—和訳と注解—』東京: 東洋文庫, 1993.

## 参考文献

- Attwood, Jayarava  
[2018] “A note on *Niṣṭhānirvāṇa* in the Sanskrit *Heart Sutra*”, IOCBS. 2018 (14) : 12-19.  
Chattopadhyaya, Chimpa, Alaka, trans.  
[1970] *Tāranātha's History of Buddhism in India*. Delhi: Motilal Banarsidass (repr. 1990).  
Conze, Edward

- [1967] “The Prajñāpāramitā-hṛdaya Sūtra”, In: *Thirty Years of Buddhist Studies: Selected Essays*, London: Bruno Cassirer, 148-167.
- Eckel, Malcolm David
- [2008] *Bhāviveka and His Buddhist Opponents*. Cambridge: Harvard Oriental Series, No. 70.
- Schiefner, A., trans.
- [1869] *Tāranātha's Geschichte des Buddhismus in Indien. Aus dem Tibetischen übersetzt von Anton Schiefner*. St. Petersburg: Kaiserliche Akademie der Wissenschaften.
- Schiefner, A., ed.
- [1868] *Tāranāthae de doctrinae buddhicae in India propagatione*. Petropoli.
- Silk, Jonathan A.
- [1994] *The Heart Sūtra in Tibetan: a critical edition of two recensions contained in the Kanjur*. (Wiener Studien zur Tibetologie und Buddhismuskunde, Ht. 34.), Wien: Arbeitskreis für Tibetische und Buddhistische Studien, 1994.
- 池田道浩
- [2009] 「『大乗論』に引用されるヴァラルチの偈」『駒澤大學佛教學部研究紀要』66, (1) - (14).
- 大八木隆祥
- [2002] 「Vimalamitra 造『聖般若波羅蜜多心広疏』に見られる『大日経』」『密教文化』208, (21) - (39).
- [2020a] 「『七百頌般若』 Vimalamitra 註について」『豊山教学大会紀要』48, 1-22 ((214) - (193)).
- [2020b] 「Vimalamitra 著『七百頌般若疏』 I の引用文献について」『豊山教学大会紀要』49, 1-14, ((224) - (211)).
- 五島清隆
- [2014] 「チベット訳『宝篋経』—和訳と訳注(2)」『佛教大学 仏教学部論集』98, 27-54.
- 大乘經典研究会
- [2021] 「如来秘密經の梵文佚文」『インド学チベット学研究』25, 35-62.
- 田中公明
- [2014] 『大乘仏教の根本〈般若学〉入門：チベットに伝わる『現觀莊嚴論』の教え』東京：大法輪閣.
- 白石(藤田)真道
- [1939 (1988)] 「広本般若心經の研究」『密教研究』70, 1-32 (『白石真道仏教学論文集』499-530 (再録))。
- 種村隆元
- [2011] 「チベット語訳『大日経』第2章に関するノート(1)」『現代密教』22, 73-84.
- 寺本婉雅
- [1928] 『ターラナータ° 印度佛教史』(西藏傳佛典譯註佛教研究, 第1輯) 東京：丙午出版社.
- 西山亮・早島慧
- [2020] 「Prajñāpradīpa-tīkā 第 XXIV 章テキストと和訳(4) — uttarapakṣa 3 —」『インド学チベット学研究』24, 219-239.
- 袴谷憲昭
- [1994] 『唯識の解釈学—『解深密経』を読む』東京：春秋社.
- 兵藤一夫
- [2000] 『般若経釈 現觀莊嚴論の研究』京都：文栄堂.
- 堀内俊郎
- [2016] 『世親の阿含経解釈—『釈軌論』第2章訳註—』東京：山喜房佛書林.
- [2019a] 「インドにおける『般若心経』注釈文献の研究—ヴィマラミトラ注(1)—」『東洋学研究』56, 165-195.
- [2019b] 「インドにおける『般若心経』注釈文献の研究—ヴィマラミトラ注(2)—」『国際哲学

研究』 8, 167-187.

[2019c] 「般若波羅蜜とマントラの語義— ヴィマラミトラの『般若心経注』より—」『Buddhakośa Newsletter』 8, 9-16.

[2022] 「菩薩は般若波羅蜜に依拠して住す—ヴィマラミトラの『般若心経注』より—」『東洋学研究』 59, 181-200.

安井光洋

[2020] 「『大乘中観釈論』における『中論』解釈の諸相」『智山学報』 69, 203-217.

渡辺章悟

[2016] 「総論 『般若心経』の成立と註釈への展開」『集成』 3-50.

\*本研究はJSPS KAKENHI (16K16697 と 17KK0031) の助成を受けたものである。

キーワード：究竟涅槃、般若波羅蜜、マントラ、起如来智諦、『般若心経』